

ライフセービング選手権

熱戦を報告

水際の命 救う技

海水浴場や湖、プールなどで安全のための監視、救助活動に取り組むライフセーバーが、水難救助に必要な技術を競い合った。第3回全日本ライフセービング選手権が10月11、12日、神奈川県藤沢市の片瀬西浜海岸であり、予選会を突破した全国52チームの1046人が出場した。女子ビーチフラッグスでは、今年の世界チャンピオンで35歳の遊佐雅美が16連覇を達成。技術の向上を目指し、ライフセーバーが繰り広げた熱戦の様態を報告する。(若林幹生)

女子ビーチフラッグスで16連覇

遊佐 雅美(35)

「いつもプレッシャーはある。勝つことで、ライフセービングの普及につながればうれしい」
7月にドイツで開かれた世界選手権の女子ビーチフラッグスで8年ぶり4度目の優勝を遂げた遊佐が、女王の実力を発揮。93年以来の連覇を16に伸ばした。
砂浜で後ろ向きにうつむきになった状態からスタートの合図で素早く立ち上がり、20センチ離れた地点に置かれたチューブを奪い合う。立ち上がりながら向きを変えるのに1秒足らず、わずか3〜4秒で

チーターのようなスタートダッシュ

勝負がつく競技だ。12日、72人が出場した午前の予選を10レース近く戦った遊佐は、10人が残った午後の決勝に臨んだ。
決勝は1レースに1人ずつ脱落していき、最後は2人で勝負する。抜群のスタートダッシュ。前傾姿勢から獲物を狙う様子は、チーターを思わせる。1回のフライングで失格となるため、遊佐でさえ「スタートの瞬間が怖い」という。それでも優勝決定戦以外は、一度も飛び込むことなく、余裕の片手でチューブを拾っていった。

競技には、瞬発力と判断力可欠だ。さらに「最後の1メートル中力を切らさないこと」とはいふ。メンタル面でもタフければならない。
身長156センチ、中高時代はの長短距離選手。92年にライフセービングに出会い、のめりだ。結婚3年目。家事に加えて、ライフセーバーの仕事も忙し。若手を指導しながら、1日9トレーニングに励む毎日だ。「限界まで挑戦したい」と、女王の目が輝いた。



競技の歩み

欧州で生まれたライフセービングは、日本では63年に赤十字社の技術者や学んだ監視員が片瀬西浜海水浴場で活動を開始したのが原点。

全国各地に活動が広がり、91年に日本ライフセービング協会が誕生した。国際ライフセービング連盟に加盟し、国内のライフセーバー有資格者は37人を超えている。

水難救助の技術を磨く全日本選手権は、75年にスタートした。今年の大分県では日本のライフセービング発祥の地、片瀬西浜海岸を本拠地とする西浜サーフライフセービングクラブが、16年連続8度目の総合優勝を遂げた。

日本ライフセービング協会の小室邦理理事長は「大会はトップアスリートを決めるものでなく、人の命を救う『レスキュー・アスリート』の祭典」と、その意義を話す。

記録

【男子】サーフレース ①井口明彦(七十九里) ②青野(茅ヶ崎) ③鈴木(東京消防庁) ▽サーフスキーレース ①松沢(下田) ②大沢(館山) ③内田(辻堂) ▽ボードレース ①堀部雄大(二宮) ②落合(東京消防庁) ③長竹(西浜) ▽オーシャンマン ①飯沼誠司(館山) ②長竹(西浜) ③井口(九十九里) ▽ビーチフラッグス ①本多辰也(東京消防庁) ②佐々木(相良) ③植木(西浜) ▽ビーチスプリント ①本多辰也(東京消防庁) ②北矢(藤沢)